

新技術・情報名	大豆不耕起播種における雑草管理技術		
実施場所	三重県農業技術センター	分類	②

1. 成果の内容

1) 技術・情報の内容及び特徴

転換畑小麦跡大豆作の播種時期は天候不順で作業可能日数が少く、雑草管理の面でも問題が多い。大豆不耕起播種栽培はこれら不安定要因を排除でき、播種前後の発生雑草を除草剤によって初率的に防除できる。

(1) 不耕起播種栽培と雑草発生:

大豆播種前の主雑草はスズメノテッポウ、ミスガヤツリ、タカサブロウ等で、播種後にはイヌビエ、メヒツバ、エノコログサ、カヤツリグサ、タカサブロウが主として発生した。不耕起は全面耕起や部分耕起に比べて雑草発生量が多い。また麦稈(約10cmに切断した麦稈500kg/10a)を散布すると雑草発生量は無散布に比べて37%と少くなり、草種別の抑草効果はミスガヤツリ>一年生カヤツリグサ>キク科広葉雑草>一年生イネ科雑草の順となった。

(2) 除草体系: ①麦刈取り後大豆播種前に非選択性茎葉処理型除草剤ジクワット・パラコート液剤(1L/10a, 散布水量100L/10a)の散布又はグリホサート液剤の少量散布(0.3L/10a, 散布水量30L/10a)等によって播種前雑草を防除し、播種後に横行法で土壌処理剤を散布する。あるいは②播種前雑草の防除と同時に播種後雑草の発生を抑制するために、大豆播種直後に非選択性茎葉処理型除草剤と土壌処理剤とを現地混用によって散布する。

2) 技術・情報の適用効果: 除草効果の安定と雑草の省力的防除を図ることができ、生産の安定に寄与できる。

3) 適用範囲: 温暖地の転換畑大豆不耕起栽培を行っている地帯。

4) 普及指導上の留意点

- (1) 大豆播種前に非選択性茎葉処理剤を散布した場合には雑草が再発生するまでに大豆を播種し、除草剤散布と播種作業をセットで行うことが望ましい。
- (2) 大豆生育期にイネ科雑草の残存や遅発生が多くみられた場合には、中耕培土前にイネ科雑草対象の生育期茎葉処理剤を散布する。
- (3) 麦稈がある場合には除草剤の効果がある。また麦稈量と土壌処理剤の必

要性の有無、麦稈がある場合の除草剤の種類・剤型と除草効果等については雑草発生量、麦収穫から大豆播種までの期間などによって異なるので適用にあたって留意する必要がある。

2. 具体的データ

(第1表) 播種前後の除草体系と残草量 (昭62)

区	播種前処理剤 薬剤名と使用量	播種後処理剤 薬剤名と使用量	イネ科 比率(%)	カヤツリグサ 比率(%)	キク科 比率(%)	その他 比率(%)	雑草計 比率(%)
1	グリホサート液 30ml/a	ロ・ラ混用 (157+40cc/a)	5	0	0	1	3
2	(散布液量3L/a)	ベンチオカーブ・プロト リン乳(70cc/a)	15	7	0	15	12
3		無 処 理	46	142	12	23	43
4	無 処 理	グリホサート・ロ・ラ混用	6	0	1	4	5
5		パラコート・ジクワット・ ロ・ラ混用	5	0	10	2	5
6		無 処 理	100	100	100	100	100

注) ロ・ラ混用=リニユロン水和剤とアラクロール剤の現地混用(散布液量10L/a)
パラコート・ジクワット液剤は100ml/a施用
試験規模: 1区20㎡、2反復、調査は1区70cm×50cm2か所

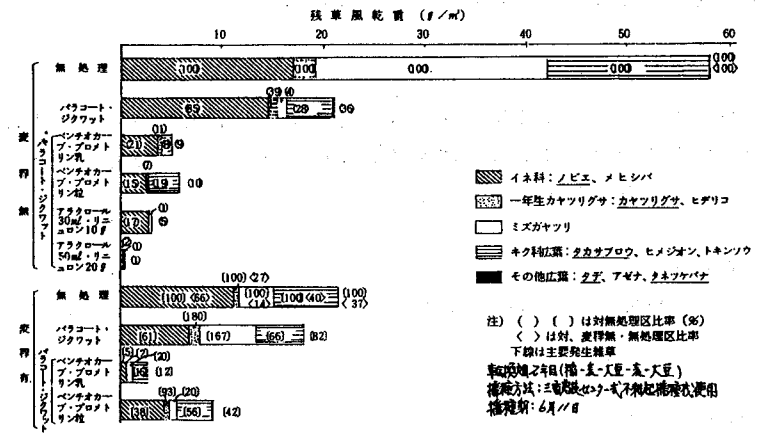


図-1 中耕時(播種26日後)の残草量(7月7日調査)

3. その他特記事項

研究課題名: 伊勢平担地転換畑における大豆の省力播種技術と深耕による多収技術の確立(不耕起播種栽培における省力栽培技術の開発)
期間・予算区分: 昭和61~62年, 転換畑特定研究